硫黄島遺骨収集
―英霊に拝礼―

慰霊援護委員
飯田　平八郎　陸自73

はじめに

昨年の5月に偕行社事務局から硫黄島遺骨収集事業参加の希望を聞かれ、即座に「希望します」と回答したのが発端でした。

その後、経歴、健康診断書等を準備し、公益財団法人「大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会」へ送付し、6月下旬に派遣内定を頂きました。

そこから出発準備が始まり、7月25日から8月10日までの実際の遺骨収集業務がスタートしました。

本記事はこれら概要について簡単に紹介するものです。これから参加を希望される皆様に遺骨収集の概要をお伝えし、慰霊委員の一員として偕行社会員皆様に更なる参加をPRしたいと存じます。

1　派遣期間

「令和5年度　硫黄島戦没者遺骨収集派遣（第1次）」は、7月25日（火）から8月10日（木）までの17日間の派遣期間でした。

2　現地日程

月　日	曜	内　容
7/25	火	前泊
7/26	水	移動・来島報告・全体会議
7/27～29	木～土	作業
7/30	日	休日
7/31～8/5	月～土	作業
8/6	日	休日
8/7	月	作業
8/8	火	追悼式・帰還準備
8/9	水	移動
8/10	木	引渡式

3　行動概要

(1)　出発準備（内示後）

ア　衣類準備

屋外作業のため、長袖、長ズボンの作業服、路外用作業靴等を用意しました。

なお、現地は高温、多湿で、しかも洗濯回数が制限されるため、複数を持参する必要があります。

イ　生活用品準備

ウ　PCR事前検査

エ　機内持ち込み荷物の重量は約10キロ以内のため、これを超える荷物は、事前に今回の総元締めである一般社

団法人「日本戦没者遺骨収集推進協会」に梱包状態で発送します。

(2) 移動

空自入間基地近傍のビジネスホテルで前泊し、そこで事前説明会が行われました。

出発当日、コロナ抗原検査を朝5時に実施し、遺骨収集推進協会に提出します。

空自入間基地より「C−2」輸送機で移動しました。硫黄島に到着後、天山慰霊碑において来島報告をし、その後宿舎において全体説明会が行われました。

(3) 遺骨収集作業

ア 作業時間

午前作業 07・40〜10・40

午後作業 13・40〜15・40

イ 作業内容

○ 地表作業

建設会社が遺骨を発見した場所を中心に、土砂を掘削し、土中から骨片、遺品、弾薬等を探します。

骨片については、水で清掃した後、乾燥させ、その後宿舎へ捧持いたします。

弾薬については陸自不発弾処理隊（EOD）に提出します。

○ 地中作業

作業に先立ち、陸自化学班がトンネル内のガス濃度等を検知します。

その後、入口近傍、トンネル内に流入した土砂を除去し、トンネル内の遺骨、遺品、弾薬等を発見し、搬出します。

骨片、弾薬の取扱いは地表作業と同じです。

○ 鑑定作業

全国から招請された医官3名により骨片の部位、同一人の骨片かどうかの判定等を実施し、戻った後、DNA鑑定を行います。

○ 自衛隊による支援

ガス検知等は陸自化学職種、弾薬回収・判定等は陸自武器職種、硫黄島内における地中作業、地上作業等の増援は海自、空自の増援部隊がほぼ毎日参加して支援してくれました。

○ 作業器材等

土工具等は日本戦没者遺骨収集協会が事前に準備してくれます。トンネル作業用ライト付ヘルメット等も借用できます。

ウ 作業場所

○ 南部落地区

米軍が上陸した南海岸地区を見下ろす台上にある南部地区砲台群の後方地区で、台端である傾斜変換線より約200〜300メートル後方に位置しています。摺鉢山まで約3キロであり、上陸部隊を各種火砲等で射撃するには絶好の地点です。

【参考】硫黄島は東京から南方に約1200キロ、父島から南方に約250キロに位置し、南海岸擂鉢山を基準とすると、全長約7キロ、最大幅約5キロ、最小幅約0・8キロ。しゃもじ形状の島で、摺鉢山が最高峰で高さ161メートル、火山地帯のため、地形は毎年1メートルから数十センチ隆起しています。

島の中央から北東部が概ね平坦で滑走路建設に向いているため、米軍の上陸目標として選定されました。

戦前の住民は約1200名で大半は戦闘前に撤収。ここに約2万3000人の兵士が派遣され、約1000人が生還、死者約2万2000人と言われており、厚生労働省により遺骨収集作業が続いているが、いまだに1万人がここに眠っていると報道されています。

米軍の上陸を想定し、地下坑道は地表から10メートル以下に設定され、多層化が追求されました。従って階段が作られていますが、約40度の勾配で歩行には注意が必要です。また、場所により地熱が上昇しています。

エ 派遣人数

約30人（内偕行社会員は2人）

その他は隊友会、遺族会、硫黄島会、旧島民等からなります。

オ 作業グループ

3個グループに分かれ、それぞれに日本戦没者遺骨収集協会員が数人付き、安全確認、作業指示を実施します。

カ 当方の強烈な印象

洗骨を実際に体験する前は、骨は滑らかな一体の白骨との認識でしたが、実際は滑らかな部分は表面だけで、内側はハニカム状態、そして色は薄い鉄さび色に染まっていました（地下坑道入口岩盤と同様の色で、鉄分が含有か?）。また、約80年間土中にあったため、非常に脆い状態でした。

(4) 収集作業日の1日の行動の一例

05・30 玄関前集合（腕章着用）

05・40〜06・00 朝食

07・10 拝礼（収集した遺骨に対し）

07・15 午前作業集合（玄関前）

07・20 体操・朝礼

07・30 午前作業出発（マイクロバス移動）

07・40 午前作業開始

10・30 作業中断

10・40　作業現場出発（マイクロバス移動）
11・35　玄関前集合（腕章着用）
11・40～11・55　昼食
13・20　午後作業集合（玄関前）
13・30　午後作業出発（マイクロバス移動）
13・40　午後作業開始
15・30　作業中断
15・40　作業現場出発（マイクロバス移動）　宿舎内清掃
16・50　玄関前集合（腕章着用）
16・55～17・15　夕食
17・50　ミーティング（本日作業内容、明日作業内容）
22・00　消灯

(5) 居住環境及び生活状況

ア　2人部屋を1人で占有、洗面台、ロッカー、冷蔵庫があります。

イ　2部屋の間に、トイレ、シャワー室が1室あります。

ウ　洗面台の水は飲用不可（よく見ると砂利が…）です。飲用の水は専用給水機及び氷を溶かしたポットにあります。

エ　室内は常時冷房状態です。

オ　外気温は最低気温27度、最高気温33度。ただし、湿度が高いため、屋外作業では、半日で作業服、下着までびしょ濡れになりました。

カ　1日に数回スコールがありました。ただし20分程で止みます。

キ　基地地区に降った雨水を集めて飲用あるいは中水に使用します。

ク　7月下旬は雨量が少ないため、洗濯は2日に1回。ただし、今回は途中から収集団に限り毎日ＯＫでした。

ケ　携帯電話は使用可能です。ドコモはＯＫですが、マイネオは通じない場合もあります。

　自衛隊施設や作業現場等の写真撮影は禁止されています。したがって、携帯電話は自室で保管し、ニュース等の視聴と家族との連絡用として使用しました。

コ　ラウンジ及び食堂のＴＶは衛星放送のみＯＫです。

サ　お酒、嗜好品、洗剤等の日用品は食堂隣のプレハブで平日夕方1時間程度の間に購入できます。また、自販機もその横にありました。

シ　食堂はコロナ対策のため、マスク着用が義務付けられていました。もちろん、食事時は当然マスクなしでＯＫです。

ス　飲酒は自室のみで可能です。

セ　毎日、肉体労働でかつ起床時間が早いため、消灯前の就寝が日常となりました。

ソ　休日の外出は複数名に限り、氏名、行先等を記入すれば可能です。

(6) 帰路及び遺骨引き渡し式

ア　8月8日に天山慰霊碑において追悼式を実施しました。その後、使用した機材、借用器材を清掃、整備し、撤収を行いました。

イ　8月9日、派遣団が収集した遺骨及び建設会社が事前に収集した遺骨を慰霊箱の状態で硫黄島兜港へ持っていき、その後、空自「C－130」輸送機で入間基地に移しました。

　当日は、硫黄島空港及び入間基地において遺骨に対し盛大な見送りを実施していただきました。また、「C－130」輸送機では慰霊箱一つに対し一つの席が用意されていました。海、空自衛隊の対応には、感謝の気持ちで一杯です。

　同日夜、ＫＫＲ東京に到着しました。

ウ　8月10日　09・30　ＫＫＲにて引渡式の予行を実施しました。

　10・30、貸し切りバスで千鳥ヶ淵戦没者墓苑に向け出発しました。

　11・00、引渡式を実施。多くの国会議員、派遣員を参加させていただいた各団体等の前で今回収集した遺骨を派遣団員から厚生労働省の職員に手渡しました。

　これで、全日程が終了し解散となりました。

4　破壊された米軍戦車見学所見

(1) 擱座場所

　硫黄島中央部にある飛行場の西端から約300メートル西の道路脇に擱座

(2) 米軍戦車の状態

ア　車種は「M－4」シャーマン。75ミリ砲装備、硫黄島用に改造

イ　改造状態

○　車体側面にコンクリート製スカートが装着、厚さ約90ミリ

○　砲塔後方に履帯が装着

ウ　改造目的（推定）

　「M－4」戦車の正面防護力は旧日本軍が有する戦車砲、対戦車砲にすべての距離で抗堪。ただし車体側面及び砲塔後面はそのままでは貫通するので、硫黄島用に改造し、機動性能は低下しても完全な防護力を付与したものと思われます。

エ　旧日本軍の戦車砲又は対戦車砲弾の命中部位

○　車体上部右前方に数発命中痕があるが、すべて不貫通で丁度アイス

クリームをスプーンですくった状態で上に跳飛していました。

○　右コンクリート製スカート部の最前方から約80センチ地点に数発命中し、コンクリート部が破損し、中の鉄筋が見える状態でした。おそらく、不貫通だったと思います。

オ　各ハッチの状況

すべてのハッチが解放された状態で、ハッチ内面は全て黒焦げ状態でした。

カ　砲塔後部の状態

砲塔後部上部傾斜変換部分に黒焦げ跡がありました。

キ　擂座の原因（推定）

「M－4」戦車は対戦車砲等の攻撃に抗堪したため、火炎瓶の肉薄攻撃により破壊されたのではないかと推察します（硫黄島守備部隊の必死の戦闘の一例）。

おわりに

わずか2週間強の硫黄島戦没者遺骨収集事業でしたが、非常に多くの経験を積むことができました。今後も偕行社会員皆様の派遣団参加を期待します。